

福祉系大学における学生の職業選択に関する要因の検討

Examination of the factor about a student's
career choice in a welfare system university.

白 山 靖 彦
野 口 康 彦

Ⅰ はじめに

近年、福祉系大学における学生の職業選択は多様化しており、きめ細かいキャリア支援が求められている（渡辺ら2008；藤田ら2009）。元来福祉系大学は、社会福祉士、保育士などの資格取得を念頭に置いた職業系大学としての色彩が強い。そのため、入学者の多くは大学進学前から職業選択を確定しており、将来福祉関係従事者になることが大学選択の目的となっていた。しかしながら、現状の福祉系大学の就職状況は、社会福祉施設、保育所などの福祉系就職者と一般企業など福祉業界とは関連のない業種への就職者が混合しており、看護などの他の職業系大学などとは明らかに就職傾向の違いが窺われる¹⁾。こういった傾向の要因には、職業選択において行動を規定する様々な情報による作用が考えられる。たとえば、経済上昇による一般企業における雇用枠の拡大、反対に社会福祉施設職員の処遇の低さ、賃金格差の問題、また社会保障関連費用の国家予算削減による将来不安など多様である。中には、「福祉はきつい、給料が安い、汚い」などといった一部の介護現場を揶揄したようなステレオタイプの情報もこれに含まれる。こういった情報の作用がマスコミや親、学校の教員などを媒体として学生の職業価値観（職業アイデンティティ）の形成期に少なからず影響を与え、職業選択行動に対して直接的に関与していることが推測できる。

職業アイデンティティとは、職業に対する価値的な側面であるとされ、個人の就労行動は仕事のどのような側面に価値をおいているかに影響するとして、職業選択行動の決定要因として位置づけられている（原2001；菰田2006）。職業アイデンティティと職業選択行動とは密接な関係があることが多くの研究によって示唆されており、職業選択行動には、職業アイデンティティの形成に影響する情報インパクトが大きな要因と考えられる。この情報インパクトに関しては、情報そのものもあるが、他者という情報提供源の影響を強く受けられていると考えられる。北原ら（2005）と鹿内（2007）は、「親」の影響との関連を示唆している。この中で親の職業、態度、価値と子どもの職業選択行動との関連があり、特に看護、保育、福祉、栄養などの専門職の親が与える影響が大きいことを述べている。また、小松ら（2008）は、福祉介護コース学生の職業アイデンティティが介護実習などの体験から形成される部分が多いことを報告している。また、エリクソンの発達段階からアイデンティティ形成の特長を引用し、福祉系介護コースの学生のアイデンティティが一般の学生より発達していることを示唆している。

このように学生の職業アイデンティティ形成には、様々な要因があることが明らかとなっている

が、中には多様な情報によって内在する福祉などに対するイメージが変容し、福祉系から福祉系以外の就職に変更する学生も散見される。この場合の要因として、経済状況や福祉職場の実態といった社会的要因だけでなく、福祉や福祉施設などに対するイメージの変容といった内的な要因が職業選択行動に大きく影響しているのではないかと推測できる。したがって、本稿では福祉などに対するイメージに着目し、学生の職業アイデンティティ形成や職業選択行動との関連について検討することとした。

II 対象と方法

2009年6月から7月の2ヶ月間において、静岡県内の福祉系学科を有する大学の学生122名を対象として、無記名の自記式によるアンケート調査を実施した。対象の学科は、社会福祉士国家受験資格、保育士などの資格が単位認定により取得できる。質問項目は全部で9項目から構成され、そのうち7項目については、イメージの時間的変容と教育効果との関連をみるために過去（高校3年生時）と現在とに分けた。各質問内容のイメージについては、わるい（1点）からよい（5点）の5順位尺度を用いた（Table1）。また、職業選択に影響を受けた事項としては、新聞・雑誌などのマスコミ、親、友人・知人、学校教員、その他による複数回答方式とした。職業選択の希望先については、福祉系、福祉系以外とし、2者選択とした。また、過去（高校3年次）と現在とのイメージについてそれぞれ回答を求めた。なお、アンケート実施前に本研究の目的ならびにデータの目的外使用の禁止について説明し、同意を得た後に回答を求めた。統計処理については、SPSS ver 15.0を使用した。

Table1. イメージに関する質問項目

福祉全般に対するイメージ
福祉施設に対するイメージ
相談職（ソーシャルワーカー、社会福祉士）に対するイメージ
介護職（ヘルパー、介護福祉士）に対するイメージ
児童に対するイメージ
障がい者に対するイメージ
高齢者に対するイメージ

III 結果

アンケート実施は、専門演習などの授業時間内に行なったため、すべての出席学生からの回収を得た。学年別では、1年12名（9.8%）、2年37名（30.3%）、3年30名（24.6%）、4年43名（35.2%）であった。これは、対象学科全学生の36.7%にあたる。全学年のイメージに関する質問項目について、

過去と現在のイメージとの得点間で t 検定を実施したところ、すべての質問項目に関して等分散が認められ、現在の得点の方が過去の得点と比較して有意に高かった (Table2)。特に、障害者に対するイメージ、高齢者に対するイメージ、相談職に対するイメージの得点差が大きかった。もっとも得点間の差が少なかったのは、福祉全般に対するイメージであった。

Table2. 時間経過によるイメージの変化

	過去	現在	p<.05* p<.01**
福祉全般に対するイメージ	3.47 (±.85)	3.70 (±.87)	*
福祉施設に対するイメージ	3.09 (±.82)	3.33 (±.91)	*
相談職に対するイメージ	3.38 (±.95)	3.99 (±.83)	**
介護職に対するイメージ	3.11 (±.90)	3.45 (±.99)	**
児童に対するイメージ	3.61 (±.92)	3.98 (±.89)	**
障がい者に対するイメージ	2.95 (±.84)	3.89 (±.76)	**
高齢者に対するイメージ	3.25 (±.81)	3.81 (±.80)	**

また、職業選択における影響を受けた情報源として、全学年では過去と現在を比較し、マスコミと知人・友人が増加し、親と学校教員が減少していた。その他は変わらなかった。3・4年の高学年では、親、学校教員からの影響も回答数では大きいことが示唆された。(Table3)。

Table3. 職業選択における情報源

	マスコミ	親	知人・友人	学校教員	その他
1年(過去)	0	3	3	2	4
(現在)	1	3	3	2	4
2年(過去)	4	13	9	15	9
(現在)	6	11	12	12	9
3年(過去)	2	6	7	12	9
(現在)	6	7	10	7	8
4年(過去)	2	17	8	9	12
(現在)	5	14	12	12	15

*過去の学校教員は高校教員を示す

次に職業選択の推移であるが、全学年における過去では福祉系103名(84.4%)であり、福祉系以外が19名(15.6%)であった。現在では福祉系が99名(81.1%)であり、福祉系以外が23名(18.9%)であった。過去と現在の職業選択における就職希望先について χ^2 乗検定を実施したところ、統計的有意差は認められなかった。ただし、福祉系以外への就職希望が福祉系から移行することが実数上認められた。なお、対象の抽出が無作為ではなく、一定の専門科目授業の受講生に偏っていた恐れもあり、この点は今後慎重に検討する必要がある。なお、対象学科の福祉系と福祉系以外の過去3年間の就職状況であるが、2007年度(福祉系55%, 福祉系以外45%), 2008年度(福祉系47%, 福

祉系以外53%), 2009年度(福祉系49%, 福祉系以外51%)であった。

続いて、現在の職業選択における就職希望先とイメージとの関連について分析を行なった。現在、福祉系を希望する学生(99名)と福祉系以外を希望する学生(23名)との間で現在のイメージの得点間について等分散が認められる場合はt検定を、認められない場合はU検定を実施した。その結果、介護職に対するイメージ、高齢者に対するイメージ以外の質問項目では、等分散が認められた。そして、福祉系を希望する学生が福祉系以外を希望する学生に比べて福祉全般に対するイメージ(3.78-3.35)、福祉施設に対するイメージ(3.40-2.96)、介護職に対するイメージ(3.54-3.04)の得点が有意に高かった(Table4)。ただし、3項目の質問項目について一元配置分散分析を実施したところ、平均値の有意差は認められたが、Welchの値がいずれも $p>.05$ であり、平均値同等性の耐久性は認められなかった。また、現在の就職希望先と過去のイメージとの関連については、福祉系を希望する学生と福祉系以外を希望する学生とのイメージ得点の有意差は認められなかった。

Table4. 職業選択におけるイメージ得点

(現在)	福祉系	福祉系以外	$p<.05$
福祉全般に対するイメージ	3.78 (±.82)	3.35 (±1.03) *	
福祉施設に対するイメージ	3.40 (±.81)	2.96 (±1.22) *	
相談職に対するイメージ	4.00 (±.81)	3.86 (±.89)	
介護職に対するイメージ	3.54 (±.91)	3.04 (±1.22) *	
児童に対するイメージ	3.98 (±.87)	4.00 (±1.00)	
障がい者に対するイメージ	3.90 (±.75)	3.87 (±.75)	
高齢者に対するイメージ	3.87 (±.75)	3.57 (±.95)	

さらに、学年ごとの現在のイメージ得点に関してすべての質問項目について一元配置分散分析を行なった。学年間に得点の有意な差が認められた質問項目は、児童に対するイメージであり、1年=12名平均値3.33 (±.99)、3年=30名平均値4.27 (±.79)であった。ただし、Welchの値が $p>.05$ であり、平均値同等性の耐久性は認められなかった。その他の質問項目において学年間の有意な差は認められなかった。

IV 考察

本結果より、得られた3つの示唆について考察を進めていく。第1は、福祉系大学における教育効果、第2に、職業選択行動に伴う情報源、第3に、職業選択行動の変容に影響するイメージの変化に関してである。

1. 福祉系大学における教育効果

学生の職業アイデンティティは、職業やそれに関連する業態の情報の影響を受けながら形成されていくものであり、職業選択行動は、そうしたアイデンティティに基づく意識的で認知的なものと仮定されている（渡辺ら2008）。そういった職業アイデンティティ形成に対して、福祉系大学における教育がどのように効果をもたらすものなのかを単純に評定することは困難である。しかし、学生が教育によって、「福祉」という概念、福祉従事者という職業、障害者や高齢者などの福祉対象者の理解が促進することで、正確な情報による職業アイデンティティ形成に少なからず寄与していると考えられる。本結果では、高校3年次の福祉などに対するイメージと現在のイメージとの差異について検討した。すべての質問項目で、過去よりも現在のイメージ得点が上昇しており、一定の教育効果があったものと考えられる。特に、障害者、高齢者、相談職に対する得点の上昇が大きく、講座形式の授業だけでなく、ロールプレイなどの演習や実際の職場体験に近い実習体験によって、イメージの変容が起きたと考えられる。ただし、過去と現在におけるイメージの変容が、時間経過による段階的調査ではなく、現在の心理状況から過去のイメージを推測するものであることから、自己成長として過去の得点を低めに設定したことも考えられる。今後は4年間という時間経過において縦断的に実施することが重要であろう。

2. 職業選択行動に伴う情報源

職業選択行動は、情報または情報源による作用による影響が大きい。これは、福祉を扱った新聞報道や友人・知人、親などからのステレオタイプの情報も含まれる。また、情報源のインパクトの大きさも無視することはできない。たとえば、大学1年次と大学4年次とでは、親の意向や情報発信の強弱は自然と異なる。このように学生は社会との関係性において最終的に職業選択行動を起すことになる。本結果では、情報そのもののインパクトというよりは、情報源に着目した。大学入学前は、就職希望先の選択について親や学校教員の影響を受けていることが多かったが、入学後は、マスコミや知人・友人の影響を受けていることが分かった。また、学年が進むにつれて再び親、学校教員の影響を受けるようになっていた。すなわち、職業選択行動を具体的にこなす卒業年度が近づいた場合、親、学校教員といったより影響力を及ぼす対象を情報源としているといえよう。ただし、どの程度の情報の強弱があるのかは今回の調査では判明していないため、職業選択行動との関連については今後の検討が必要であろう。

3. 職業選択行動の変容に影響するイメージの変化

職業選択行動を規定する要因として、社会福祉施設、保育所などの福祉系就職から一般企業などの福祉系以外の就職へと転換する学生が一定数存在することから、何らかの影響によって引き起こされる福祉などに対するイメージの変容が考えられる。また、元々イメージが悪いために福祉系以外の就職先を希望する場合も想定される。本結果より、福祉系に就職を希望する学生と福祉系以外を希望する学生とでは、イメージの得点に差異が認められた。特に、福祉全般に対するイメージ、

福祉施設に対するイメージ、介護職に対するイメージの得点が福祉系を希望する学生の方が有意に高かった。また、過去に関しては、すべての項目で有意な差は認められなかったことから、在学中に何らかの影響によってイメージの変容が行なわれたと考えられる。特に、福祉施設に対するイメージと介護職に対するイメージに関しては、教育計画上社会福祉施設実習または保育所実習の影響が大きいと推測される。実習は利用者との直接接​​触だけでなく、職員の態度、施設運営など様々な情報が入手できる場である。また、中には社会福祉士取得や保育士の実習であるにも関わらず、利用者の身体ケアを中心とした介護体験を主に提供する施設も少なくない。そういった体験によって、事前の学習で培ったイメージとの間に乖離が生まれ、イメージの低下が起きたと考えられる、ただし、調査対象の福祉系大学では、福祉施設実習が2年と3年次、保育所実習が2年と3年、4年次と複数年度に跨っており、どの実習でイメージの変容があったかについては特定できない。また、実習体験前後の意識調査は質問項目としていないため、今後質的なインタビュー調査によって明らかにすることが重要である。

V まとめ

本研究では、学生の抱く福祉などへのイメージと職業選択行動との関連について検討した。福祉系大学の教育効果は福祉などへのイメージの観点からは一定程度みられるものの、他の職業系大学とは違い、就職希望および実際の就職先は多様である。その要因として、元々福祉などへの低いイメージをもって入学する場合と、在学中に何らかの情報や実習体験などの影響によってイメージが低下し、福祉系の就職希望からそれ以外の希望先に転換することが示唆された。特に、福祉施設に対するイメージと介護職に対するイメージが低下していることが明らかとなった。今後は、在学中の様々な実習などのイベントによって、イメージがどの時点でどのように変容したのかを精査する必要がある。そして、福祉系大学の学生の多様な職業アイデンティティに対するキャリア支援教育のあり方についてもより詳細な検討が求められる。

本研究におきまして、調査協力を頂い皆様に深謝致します。なお、本研究は、静岡英和学院大学共同研究費の助成によって実施された。

注

- 1) 静岡県内の福祉系大学2ヶ所、看護系大学1ヶ所ならびに首都圏福祉系大学5ヶ所、看護系大学3ヶ所の大学ホームページから、就職先状況のサイトを閲覧した。

文献

原千恵子 (2001)：社会福祉領域におけるアイデンティティ形成と職業選択について；(2) 青年の職業選択とアイデンティティ形成，山野研究紀要 9，65-70。

藤本忠明・東正訓 (2009)・ワークショップ大学生活の心理学, ナカニシヤ出版。

北原佳代・佐々木美樹・岡部恵子 (2005): 職業選択に対する学生の考え方と親への相談状況との関係, つくば短期大学紀要33, 121-139。

小松和子・川野泰子 (2008): 福祉介護コース学生のアイデンティティと自己効力感-職業選択と実習による社会経験との関係-, 花園大学社会福祉学部紀要16, 1-9。

菰田孝行 (2006): 大学生における職業価値観と職業選択行動との関連, 青年心理学研究18, 1-17。

鹿内啓子 (2007): 大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性, 北星論集44 (2), 21-32。

渡辺美枝子・E.L. ハー (2008): キャリアカウンセリング, ナカニシヤ出版。